

観測テーマと対象

下図（図5 - 4）に示すのは、5年ごとの観測天体種別の比率の変化である。この図から明らかなように、観測天体はこの間に大きく変化している。すなわち、初期の頃は星（恒星）が過半数を超え、星団・星雲や銀河・銀河団が残りシェアしていた。80年代から銀河・銀河団等の遠い微光天体の比率が徐々に増えてきて、2000年頃には星とほぼ拮抗するまでになった。

この状況は世界的な観測研究の趨勢と併行したものであるが、これは岡山天体物理観測所がその流れを加味して新しい観測装置を開発・製作し、実際に共同利用観測用に公開してきたことと密接に関連している。個々の観測装置の履歴は図3 - 1（P72）に記載しているので、参照されたい。

長期的な傾向で見ると、カセグレン分光器が90年代に順調に稼働し、それを追ってOASISが利用できるようになって、カセグレン焦点の使用と銀河の観

測は増えた。対象は微光天体へと移り、新月期の需要が逼迫したのもこの頃である。また、OASISによって星団や星雲等の観測に新しい展望が開けたこともあり、90年代の後半はそれらの天体が多くなった。

そして、2000年にはHIDESが公開されるに及び、恒星の観測が再び見直された。銀河や微光天体は岡山天体物理観測所よりすばる望遠鏡へと流れ、役割分担の上からも、188cm反射望遠鏡では恒星の高分散分光に重点が移っていくことと思われる。

ところで、機器開発に関連して、望遠鏡時間の使用も多少の変化が生じている。それは図5 - 4にも見られるように、テスト時間の増加である。1990年代にはOASISに引き続きHIDESが製作され、立ち上げのフェイズではそれらの観測装置を望遠鏡に取り付けて、実際の観測に近い状態でテストすることも頻繁に行われるようになった。

岡山天体物理観測所における観測研究の成果は

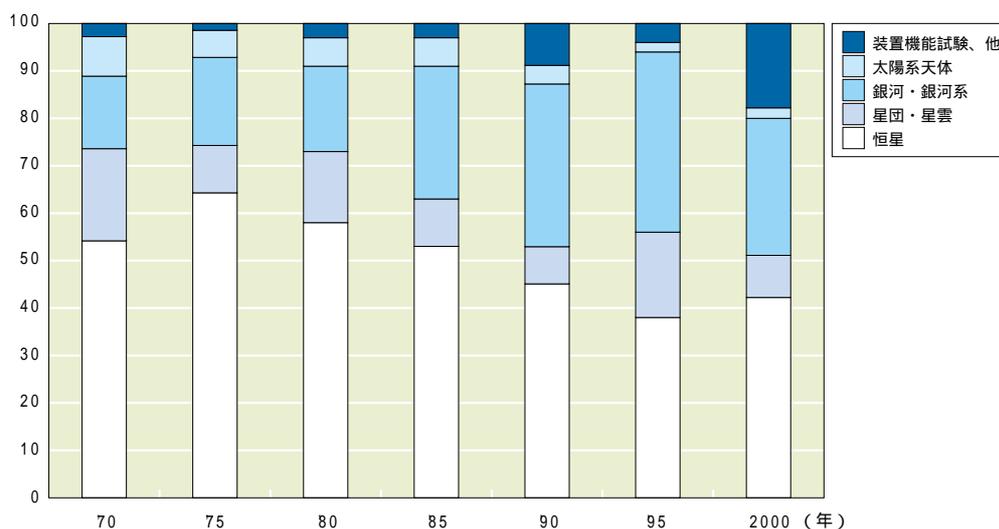


図5 - 4 観測テーマの推移